があってもそれは正当であるという点、また最後の決定が会議での投票あるいは大衆投票によってなされるという点でも、ファシズムとは違っているからというような論じ方であった。だが実際、改訂派の運動が形の上で然るべきファシスト集団になっていった過程をみれば、ファシズムを抜きにして果たしてあれだけ非民主的なものになっていったか、想像するだに困難である。ジャボティンスキーは一九三二／三年には世界シオニスト機構から撤退する時がきたと決心していたが、改訂派の世界同盟執行部のほとんどは、この分裂行動によって得られるものがなかったから、それには反対であった。彼は恣意的に運動に対して直接コントロールをおこなうことによって問題の議論を封じ、自らと、取って替わろうとする執行部とのどちらを選ぶのか、一般党員に選択させる手に打って出た。一九三二年一二月に書かれた手紙は、自分自身、組織をどんな方向に導きつつあるかを完全によく理解していたことを示している。「改訂派の運動にもひとりの原則的な統率者、〈リーダー〉が要る時が来たことは明白だ。〈リーダー〉という言葉を私はお嫌うが、よろしい、それが必要ならば私がなろう。」[9]

投票で負けるわけにいかないこともジャボティンスキーにはわかっていた。数万人の若い褐色シャツのベタール運動員のためにジャボティンスキーはヴァイツマン閥同様に育ちのよいブルジョアから成っていた執行部に対抗してこのファッショ的制服の若者たちが欲していたミリタリズムを代表した。「ディアスポラ」改訂派の中心的要素をなしていたのはつねにこのベタールの青年集団だった。準公式の『改訂派運動史』は、民主的基礎の上に組織を構築すべきかどうか議論した後「軍隊タイプのヒエラルヒー的構造」の組織にするという決定がなされた[10]、と述べている。古典的形式でベタールはロシュ・ベタール（ベタールの最高司令）（それまでつねにジャボティンスキー）を選んだが、今回は七五パーセントという多数の支持を与え、ジャボティンスキーは各民族単位でリーダーを選び、選ばれた彼らがさらに下部のリーダーを

選抜した。反対も認められたが、一九三〇年代初期の穏健派パージ後、重大な内部危機はもっぱらいずれも「最大限綱領派」からひきおこされるものになった。すなわち、いわくジャボティンスキーはファシストたりえない、いわく彼は親英的すぎる、いわく反アラブとしては不徹底だ、と時によってさまざまながら右翼過激派からの批判に終始した。並のベタール・メンバーが褐色シャツを着用するとき、自分がファシズム運動の成員でジャボティンスキーが自らのドゥーチェであると自覚すれば、それでよしということになった。

ユダヤ人ブルジョアジー——我々の建設資本の唯一の源泉

はじめから改訂派はミドル・クラスを上得意としており、左翼に対しては長い間憎しみを抱いてきた。一九三二年にひとりの若者がジャボティンスキーに手紙を書き、なぜジャボティンスキーが猛烈な反マルクス主義者になったのか尋ねているが、ジャボティンスキーは後に「シオニズムとコミュニズム」という注目すべき論考を書き、そこで両者が全面的に相容れない理由について次のように説明している。ユダヤ人の眼から見れば「共産主義は、我々の建設資本の唯一の源泉（ユダヤ人ブルジョアジー）を根絶しようとあいつとめている。ユダヤ人ブルジョアジーの基金は我々の基礎であり、共産主義の原則はブルジョアジーに反対する階級闘争である」。パレスティナではマルクス主義は定義上シオニズムに対する最も激しい敵手たることを意味した。

共産主義の本質はヨーロッパ人の支配に抗する東方諸民族を煽動し励ますものでなければならない点

にある。ヨーロッパ人の支配は共産主義から見れば「帝国主義的」で、人を食いものにするというが、私はそうではないと思うし、ヨーロッパ人の支配は東方諸民族を文明化したと考える。しかしそれは付随的問題で重要な事柄には入らない。明らかなことはひとつ、共産主義は東方諸民族を煽動しており煽動しなければならない。しかも民族の自由の名においてはじめてそれをなしうる。共産主義は東方諸民族に語りかけているし、語りかけねばならない。「諸君の土地は諸君のものであって、誰かよそもののものではない。これはアラブ諸族およびパレスティナ・アラブの人びとにどのように語りかけるかということだ。……我々シオニストの肺腑にとって共産主義は窒息ガスである。これが共産主義をどう取り扱わねばならないかという処方箋である。[11]

正当な前提からまちがった結論へ飛躍してしまうというのがジャボティンスキーの典型的な態度であった。ロジックとしてはシオニズムとマルクス主義はまさに非両立的なものなのだが、二つの思想をミックスしようとする者がそれこそ敵の陣営だということにはならない。実際、社会主義シオニストは社会主義をシオニズムのいけにえにしているのであってその逆ではないのに、ジャボティンスキーは共産党とポアレ・ツィオン派との間に実質的相違はないと断じた。

階級に対する見方では共産主義と他の社会主義の形態との間に何ら違いはないというのが私の見解である。……この二つの陣営の相違があるとすればただひとつ、それは気質の違いであって、前者がしゃにむに突進するのに対して後者はそれより少しゆっくり行こうという違いである。そんな相違はものを書く際にわざわざ注記する必要のない相違である。[12]

ジャボティンスキーの精神はつねに直線的、一次元的なものに陥った。資本家階級はシオニズムの主部隊であった。当然ストライキはパレスティナへの投資を駄目にするということになる。それは先進工業国では受け入れられ、経済も受忍できるかもしれないが、シオンの丘の土台構築でいわば煉瓦がひとつひとつ積み重ねられているパレスティナのような地ではとても受け入れ難い。イタリア・ファシズムにまさにならって改訂派も、ストライキ、ロックアウト「双方」に反対した。とくにストライキは最高の犯罪とみなしたのである。

「労働仲裁機関」オブリガトーリ・アービトレイションという言葉で意味するものは何か。それはかかる永続的機関を選ぶことによって、それに訴えることが産業紛争の調停の唯一正当な方法であると宣明していることであるはずだということ、その評決が最終的なものでなければならないということ、ストライキもロックアウトも（ユダヤ人労働者に対するボイコットも）シオニズムの利害にとっては反逆罪たることを宣言すべきで、民族が行使しうるあらゆる法的道徳的手段によって抑制すべきことを意味する。[13]

改訂派は労働シオニストを粉砕するために、国家権力掌握の段階まで待っているつもりはなかった。（改訂派の挑発行為によって一九二九年のアラブ反乱が誘発させられたため、ジャボティンスキー自身は英高等弁務官によって入国禁止処分を受けていたが）、パレスティナの改訂派リーダー、アキメイルは、機関紙で自らの「ファシスト日誌（ヨメン・シェル・ファシスティ）」を掲載するという目に余る行動をとった。彼はイタリアのスクワドリスティに相当するブリト・ハビリョニム（テロリスト同盟）を傘下において

※図書館貸料は大切に取り扱い、

いた。これは古代のシカーリイ（ローマに対するユデーア反乱期に活躍した短剣駆使のゼーロイタイの中の暗殺集団）にちなんで様式化したものであった。さらにアキメイルは改訂派の青年たちをかき集め、労働シオニストと最終的に決着をつけようと呼びかけていた。

我々は行動のための集団を創出しなければならない。ヒスタドゥルートを物理的に殲滅するためである。連中はアラブよりひどいやからだ。……諸君は学生ではない。全部モラッシズ（選りすぐりの精鋭）だ。……ラーテナウを殺害したドイツの学生たちの流儀にならって殺人をおかせる人間は諸君の中に〔まだ〕ひとりもいない。ドイツ人を支配した民族主義精神を諸君は〔まだ〕有していない。……ひとりとして諸君の中には、カール・リープクネヒトおよびローザ・ルクセンブルクを殺害したやり方にならって殺人をおこなえる人間がいない。[14]

パレスティナではシオニストたちがヒスタドゥルート組織のかたちをとって何千というアラブ労働者をユダヤ人のオレンジ果樹園の季節労働から駆逐するのが目撃されたが、他方では改訂派ファシストがヒスタドゥルートを襲撃することも頻繁になっていた。アラブ労働者は自己防衛するためのリーダーシップをなお欠いていたが、ヒスタドゥルートはよく組織されていた。一九三四年一〇月一七日、一五〇〇人の労働シオニストが改訂派の活動拠点を逆襲し、数十人のファシストを負傷させたハイファ決戦を含む一連の激しい衝突を経て、改訂派の軍事行動は衰えた。ヒスタドゥルート運動員たちには、ファシストの猛攻撃に対して相手との戦闘遂行・敵粉砕によって応える覚悟が十分あったが、労働シオニスト指導部は世界の他の地域同様、パレスティナでもファシズムと闘うことを望まず、重大な衝突によりディアスポラ・シオ

ニズムのミドル・クラスの支持者たちが離れていくのではないかと恐れ、改訂派の撲滅を回避した。

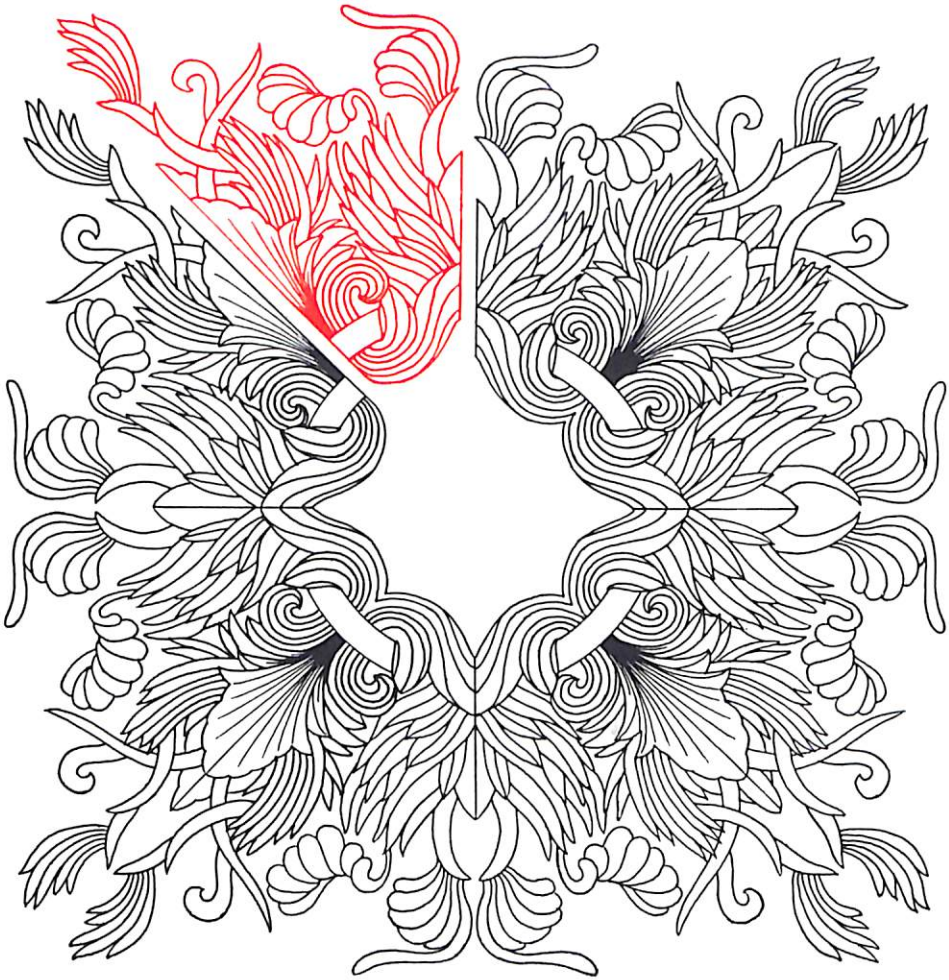
改訂派とイタリア・ファシストとの関係

一九三〇年代初期、ジャボティンスキーはイタリアで党学校を設立することを決め、公然とファシストたることを自認していたイタリアのローカルな改訂派メンバーもローマに裏面工作をおこなっていた。ジャボティンスキーは、イタリアを党学校の場所として選ぶことが、ただ改訂派＝ファシストのイメージを確証することになるだけだということも十分認識していたが、自分の「敵」がどんなことを考えるかについて全く意識しなくなるほどに「右」旋回してしまっていた。さらにイタリアのジャボティンスキー信奉者のひとりに対して、改訂派は申し出があればそこに党学校を設立することを考えるが、「我々がそれをイタリアに設立することにしたのはよいことだ」[15]と強調さえしている。一九三四年にはイタリアはすでにその決定をおこなっており、改訂派への好意を示していたが、ソコロフ、ヴァイツマンほか世界シオニスト機構指導部はロンドンとの関係を絶つことも全く考えなかった。イタリアも世界シオニスト機構内部において社会民主主義労働シオニストがますます優勢になることをよろこばなかった。労働シオニストは、どんなに距離をとっていようとも、ファシズムの敵たる自陣営の「地下組織」社会主義者と提携していたからである。したがってイタリア政府は、はっきりシオンのファシストたる改訂派に対する支持を示すことを全くいとわなかった。一九三四年一一月、ムッソリーニは、黒シャツ隊によって運営されているチヴィタヴェッキア海軍士官学校でベタールが兵団編成するのを認めた。

一九三三年のアルロゾロフ暗殺事件、アキメイルにより組織された対ヒスタドゥルート・スト破り運動

図書館資料は大切に取り扱い、

叢書・ウニベルシタス 705

ファシズム時代のシオニズム

レニ・ブレンナー著
芝 健介 訳